

大学時報

UNIVERSITY CURRENT REVIEW

No.371

2016

11

隔月刊



クリスマスマーケットで来場者とふれあうボランティア学生（宮城学院女子大学）

特集 宗教系学部・学科の現在と意義

座談会 新たなインターンシップの意味付け

小特集 保健室のいま

明日への試み 亜細亜大学

わが大学史の一場面 國學院大學

加盟校の幸福度ランキングアップ 法政大学／國學院大學／立教大学

クローズアップ・インタビュー

株式会社渡辺教具製作所 取締役会長 渡辺美和子さん

日本私立大学連盟



井上田一の鞆

未来宣言

— 東洋大学創立125周年記念 誓いの言葉 —

東洋大学は、125年の歳月をかけ、創立時の哲学館から今日この日を迎えた東洋大学へと大きく変わることができました。中世ヨーロッパに成立した大学に比べれば、その歴史はあまりにも短く、まだまだ若いと言えます。しかし、本学にとってこの125年は激動の歳月であり、本学を支えてくださった多くの賢人の御尽力により、数々の困難を克服することができました。

創立者、井上田一先生が生誕の機命と志として実践してきたこと、それはあくまでも在野にあって、哲学教育を通じて、社会の改革に奉仕する傑出した人材を育成することでした。円了先生は、物事に於いてあらゆる角度から思考を深め、真理を探究し、そこで得られた考えを実行に移すこと、すなわち「哲学すること」を重視したのであります。知性（学力）と徳性（人間力）を十全に備え、主体的・主体的に物事に取り組み人間の育成に力を注ぎました。なお、明治の時代において、円了先生はより豊にわたり世界を歩き、東洋の文化・人間性そのものに直接触れ、その体験から日本の伝統を尊重し、かつそれを普遍的な真理に照らし的確なことを告げました。

東洋大学がこの125年間にわたり、変わらぬ次世代へと引き継いできたものは何かと言えば、創立者のこの崇高な理想であり、それは東洋大学のDNAとさえもいえます。

いま、世界は大きく変化し、グローバル化の激が我が国にも押し寄せてきています。グローバル化とは何か？それは一言でいえば「世界標準」の仕組みを取り入れ、その中で永続的な成長を遂げることだと思えます。この流れは私たちが決して振り戻せるものもありません。しかし、東洋大学は困難を恐れず立ち向かいます。東洋大学の役員・教員・職員は信念と投資をもった素晴らしい人材です。一人ひとりが熱い志を胸に秘め、努力を惜しまず、団結して共働る、新たな課題を乗り越えていきます。なぜなら、「人材の育成」という、円了先生が掲げた崇高な理想を、未来の世に引き継いでいく責務が私たちにいるからです。

その責務を通じて、東洋大学は、受験生・保護者・高校の先生方・企業界の皆さまから選ばれる大学でありたい。また学生の夢をかなえる大学でありたいと願っています。

私たちは未来に向けてここに宣言します。

東洋大学は、「哲学すること」の教を根本として、世界標準の教育・研究・社会貢献活動を推進するのみならず、国際的に優れた水準の大学の発展を目指し、役員・教員・職員・学生のすべてが一体となって、卒業生とともに奮闘努力してまいります。今日、未来へ築き立つこの日を胸に踏み、創立者・井上田一先生の崇高な理想を次世代へと届けることを誓ひ、増進社会の未来に貢献する大学の理念を求め、私たちの手で新しい歴史を創出し、進化し続けていくことを誓います。

2012年11月23日
東洋大学 学長 竹村敬男

未来宣言

Declaration for the Future

— A Vow Made at Toyo University's 125th Anniversary Ceremony —

Toyo University has evolved over the 125 years since its establishment as the Philosophy Academy (Tetsugakukaikan) to become what it is today. Compared to universities that were founded in medieval Europe, it could be said that our university is still very young, with a short history. However, the past 125 years were tumultuous. We were only able to overcome the numerous challenges we faced because of the efforts and cooperation of the many wise men and women who supported our university.

The lifelong mission of our university founder, Enryō Inoue, was to use philosophical studies to nurture talented youth, who would dedicate themselves to social reform, and to conduct such education distanced from government power. Dr. Inoue prioritized "philosophy in practice" in his education; namely to study and reflect deeply on issues from all possible perspectives to arrive at the truth, and then to apply it in real-life activities.

He was also committed to cultivating talented people fully equipped with both intellect (knowledge) and moral character (comprehensive human capacity), who could engage in matters both voluntarily and proactively. Although it was still the Meiji Era, Dr. Inoue travelled around the world three times, coming into direct contact with cultures and peoples of both the East and West. This experience led him to value Japanese tradition and appeal for the need to examine it within the context of universal truth.

This noble ideal of our founder is what Toyo University has bequeathed unchanged to following generations over its 125-year history, and it can be described as our institutional DNA.

Today, the world is changing significantly and globalization is sweeping our country. What is globalization? In a few words, I believe it involves adopting systems based on "global standards" and achieving lasting growth therein. This trend may present us with yet more challenges. Nonetheless, Toyo University will face up to such challenges without fear. I am proud to say that our board, faculty and administrative staff are highly capable people who have firm convictions and determination. They will overcome new challenges, each by holding high aspirations, giving it their all and collaborating with others, because we are entrusted with the mission to bequeath to future generations the noble ideal of Dr. Inoue, that of cultivating human resources.

By implementing this ideal, Toyo University hopes to be the university of choice for future young people, their parents, teachers and companies alike, and one that makes students' dreams come true.

We hereby declare to the future that Toyo University will abide by its roots of teaching the practice of philosophy, and not only promote world-class education, research and social contribution activities, but also strive to become a globally acclaimed university. Our board of directors, faculty, administrative staff and students, will work as one with the alumni to achieve this goal. Mindful of this day we embark on our journey to the future, we take joy in delivering Dr. Inoue's noble ideal to the generations to follow, and with the aim of establishing Toyo University as a staunch contributor to the future of the world, we hereby declare that we will take the initiative to create new history as we continue to evolve to further heights.

November 23, 2012

Yoshinori Takemura
President of Toyo University





宮城学院女子大学

現代社会のニーズに合った人材育成のため
学院創立130周年の今年から
4学部9学科体制へ



1886年に設立された、宮城学院女子大学の前身である宮城女学校は、130年後の2016年、現代社会のニーズに合致する人材を育成するため、従来の1学部10学科から4学部9学科体制に移行しました。

「福音主義キリスト教の精神に基づいて学校教育を行い、神を畏れ敬い、自由かつ謙虚に真理を探究し、隣人愛に立って全ての人の人格を尊重し、人類の福祉と世界の平和に貢献する女性を育成すること」という建学の精神の下、宮城学院女子大学はこれからも、東北の女子教育をリードし続けます。

現

代ビジネス学部

「観光」・「国際」・「地域」を学び 豊かな社会を創造するビジネスパーソンへ

現代ビジネス学部では、ビジネスの基礎知識やスキルを学ぶとともに、地域や企業と連携して実践的なビジネスプロジェクトを体験します。女性が活躍する「観光」「国際」「地域」の分野を中心に学び、世界のさまざまな立場の人々と交流を進め、多くの友人をつくり、豊かな社会を創造するビジネスパーソンを育成します。



地域社会の現状を実践的に学ぶ



諸産業の現場を見学

教 育学部

教育現場からの多様なニーズに 対応する三つの専攻

教育学部には「幼児教育」「児童教育」「健康教育」の三つの専攻があり、教育・保育・健康・社会福祉に関わる研究と人材育成を通して、社会に貢献することを目指しています。同じ目標を持った仲間と夢に向かって高め合い、実践に役立つ即戦力と継続的な学修力を培い、社会を支える女性としての成長を力強く応援していきます。



造形表現の授業風景



聴覚検査の実習

生活科学部

多様化する 「食」「健康」「生活」に 密接に関わる人材を育成

食品栄養学科と生活文化デザイン学科の二つからなる生活科学部。食品栄養学科では、管理栄養士や栄養教諭などの食と健康のスペシャリスト、生活文化デザイン学科では家庭科教諭や建築士など、多様化する「食」「健康」「生活」と密接に関わる人材を、それぞれ養成しています。



給食施設を想定した実習



空間デザインを提案する授業



アンサンブルについて学ぶ授業



英語学コースの授業風景

幅広い専門知識・教養を駆使して 地域・国際社会に貢献できる人材に

学芸学部には日本文学科、英文学科、人間文化学科、心理行動科学科、音楽科の五つの学科があります。各学科で学ぶさまざまな専門知識はもちろん、幅広い教養を身に付け、現代社会が直面する多様な問題を解決することによって自分自身を表現し、地域社会や国際社会に貢献できる人材を育成することを目的としています。

学 芸学部

サマー
カレッジ

参加者全員で 「遊び＝学び」を創造

サマーカレッジは、50名を超える小学生を二日間にわたって宮城学院女子大学に招いて展開する「自然の中で遊び、学び、発見する」がテーマの総合型イベントです。周囲に森や沼沢を抱える「自然豊かな大学」を舞台に、創造的で刺激的な体験を子どもたちに提供す



森の遊歩道ではあちこちに不思議や驚きが！

ることを、主眼としています。自然の素材を使ったアート作成、大学教員の専門に基づく授業、森歩きや虫取りなどの遊び、趣向を凝らした食事や音楽鑑賞など、盛りだくさんの内容を、存分に楽しんでもらいたい。そのために、数十名のボランティア学生が準備段階から関わり尽力しています。学生・教員も含めたオープンな対話を重視するなかで、子どもたちが自由に活動しさまざまな発見をする。「サマーカレッジ」は、小学生、大学生、教員が協働して「遊び＝学び」を創っていく実践の場です。



彫刻家の先生を招いて
森での体験や発見を墨絵の巻物に



真夏の強烈な日差しを利用した
空気の膨張率についての実験

大学時報

No.371

2016.11



男女共同参画時代の 女子大学

平川 新 ● 宮城学院女子大学学長

2000年に97校だった女子大学は、2014年には75校まで減りました。大学間競争の激化と少子化を見据えて、男女共学に転換する女子大学が増えたからです。しかし私は、女性の自立とライフデザインを強力にサポートする女子大学の教育こそが男女平等の思想を支え、男女共同参画の時代にふさわしいと確信しています。宮城学院は女子教育のために1886年に創立されましたが、その建学の精神を今こそ守り続けたいと考えています。

女性活躍促進時代における女子教育

大日向 雅美 ● 恵泉女子園大学学長

はじめに

女性の活躍が各方面で求められている。以前から政府は「二〇二〇三〇」の標語の下、社会のあらゆる分野で指導的地位に就く女性の割合を2020年までに30%とする目標を掲げてきた。2015年8月には、働く場面で活躍することを希望する全ての女性がその個性と能力を十分に発揮できる社会の実現を目指した「女性活躍推進法」も成立した。国際的なジェンダー統計などからも、日本は「経済大国」である一方、女性が社会の中心で登用されることが少ない「女性小国」だと指摘されて久しい。昨今の女性活躍促進の流れがこれに一石を投じ、女性の生き方に根本的な転機となすことを期待したい。そのためにも今、そして今後の日本社会に求められる女

性の活躍とは何か、どのような力の育成が必要なのかを女子大学である本学の取り組みを基に考えてみたい。

1 女性活躍促進イコール「生涯就業力」

私は本年4月に学長に就任して以来、「生涯就業力」の育成をモットーに、恵泉女子園大学は変わると宣言し、教職員一丸となって改革に邁進している。一つには、少なからぬ大学が直面している入学者減少対策が本学でも喫緊の課題とされているためであり、同時に、長い女子教育の伝統をもつ本学園の教育理念を女性活躍促進の時代を迎えた今こそ発揮したいと願うことである。

「生涯就業力」とは、聞き慣れない言葉であろう。若い世代の活躍が話題にされる時に通常用いられる

のは「就職力」であり、大学評価の一つとして注目されるのも「就職率」である。就職は、学生が社会に巣立っていくスタートとして重要であることはいうまでもない。

しかし、女子大である本学が目指しているのは、大学卒業時点での「就職力」にとどまるものではない。むしろ、生涯にわたって精神的・社会的・経済的な自立を目指して、しなやかに、したたか（強か・健か）に生きる力の育成である。具体的には、「社会人基礎力」（2006年経済産業省提唱）と努力に裏付けられた自己肯定感の育成である。

なぜいま、「生涯就業力」が女性に必要と考えるのか。それは、日本女性の多くが直面している「生きにくさ」にあり、同時に、近未来に予想される労働市場の変化への対応の必要性からである。

結婚・子育て・介護など、夫や家族の都合に合わせて人生設計を変えざるを得ない女性が依然として大半である。他の先進国にはほとんどみられない、いわゆるM字型労働力曲線は、近年、やや改善傾向にあるとはいえ、その実態は大きく変わっていない。ワークライフバランスの推進が図られているの

もそのためである。

それに加えて、AIといった技術革新などによる社会環境の大きな変化によって引き起こされる近未来の労働市場の変化を考えれば、単にM字型労働曲線の改善で済む問題ではないと予測できる。ピーター・ドラッカーも指摘しているが、会社や事業の寿命が個人の労働可能寿命よりも短くなる時代に突入しつつある。働く者は一生の間にいくつもの異なる分野で異なる能力を発揮することが求められるという歴史上初めての現象に直面する。こうした社会変化によって転職という岐路に立たされ、そのつど職務遂行に必要な特定の知識・技能の追加修得が必要となる。岐路に立つて臆することなく挑戦する志向性と、それを支える動機・価値観・信念、さらには周囲の支援を獲得する積極性・協調性の修得が、いま以上に求められる時代になる。前例のない人生設計が必要となることは男女を問わないであろうが、しかし、これは女性にとってけっしてマイナスとは限らない。むしろ、従来、単線的な人生を保障されることのなかった女性にとって、ポジティブな人生を手中にする好機でもある。生涯にわたってどんな

時でも生きる目標を見失わず自分を磨き続け、身近な人に尽くし、社会のために生きること喜びを見いだせる力の発揮が求められているのである。その基礎となる力を在学中に身に付けさせることが、女子高等教育機関の役割と使命であると考える所以である。

2 恵泉の建学の理念と女性の「生涯就業力」

「生涯就業力」を掲げた本学の大学改革宣言であるが、けっして白紙からのスタートではない。改革の原点には、恵泉ならではの建学の理念がある。恵泉学園大学は1988年に設立されたが、学園の創設は1929年である。第一次世界大戦後の世界恐慌の最中であって、真に平和な社会の構築を目指し、世界に心を開き自立した女性を育成することを目指したキリスト者・河井道の理念が、「聖書」「国際」「園芸」を学びの基礎として、90年近く脈々と受け継がれている。

国を挙げて女性の活躍促進が高らかにうたわれる昨今の風潮を歓迎し期待もするが、そこに課題があ

るとすれば、目指すべき女性活躍の姿が一面的な印象を与えてはならないという点である。官庁や大手企業、あるいは政治の世界の中枢など、社会の表舞台に立って活躍する女性が脚光を浴びる形で、女性活躍が前面に打ち出されている感が否めない。その多くが、一つの目標に向かってまっしぐらに競争社会を生き抜くモデルに偏るとしたら、置き去りにされる女性が少なくないだけではない。むしろ、多様化複雑化する時代に即応したさまざまな活躍の可能性を狭めることが懸念されるのである。既にひたひたと押し寄せつつある新たな時代に果敢に挑戦しようとする動機と、それを自身の人生に具体化しうる知識と技能の修得を保障することこそが、真の女性活躍促進につながると考える。それは「基礎的な知識・理解・技能」「現状を把握し、たくましく解決し続ける力」「他者と共に歩み、共に生きていける力」を確かなものとすることに他ならない。

「まっすぐな狭い道、人が踏みならした道を行くことに満足してはならない」「いかなる所にあっても、無くてはならぬ者として喜ばれる方におなりなさい」「汝の光を輝かせ。一燈ともなり万燈ともなり」。創

立者・河井道の言葉である。女性活躍促進時代の女子教育に真に必要な力を「生涯就業力」と定めるのは、これらの言葉に示されている本学の建学理念に改めて立ち返ることである。

3 これまでの教育実践への誇り

本学の改革は建学の理念を原点とした上で、具体的には、開学以来積み重ねてきた30年余りの実績を改めて「生涯就業力」の育成に焦点化し、授業改善や学修支援につなげていくことである。

本学の教育実践の特徴の一つに、例えば学生が欧米だけでなくアジア各地に赴き、発展途上、貧困・差別、森林破壊など世界で起きている深刻な問題や、文化遺産を通して見る歴史などを現地で学ぶ「体験学習」がある。また、教育機関としては全国で初めて、有機JASの認定を取得した教育農場（7000平方メートル）で野菜や花を栽培する「生活園芸」がある。いずれも、文部科学省の「特色ある大学教育支援プログラム（特色GP）」に採用されたものである。

額に汗して土に親しみ、自然と命の大切さを心に

覚える「園芸」、広く海外に出て異文化と出会う機会を通して、偏見や先入観にとらわれないしなやかな知性を育む「国際」、かつ、こうした学びの基礎に神を畏れ、隣人を愛する「聖書」を置いた学びを通して、学生たちは身近な人を思いやり、皆で分かち合い乗り越える力の大切さ、自然と命への感謝の思いを確かにしている。これまでの教育は間違っていないという自信が、改革への大きな力となっている。

4 小規模な女子大ならではの挑戦

一方、改革作業の途上で反省点と課題も明らかとなった。これまでの教育実践は教職員の属人的なレベルの取り組みの中で完結し、良い教育をしているという自己満足に終始してはいなかったかという反省である。個々に尽くしてきた実践を「生涯就業力」育成の下、全学的に組織化・可視化し、教職員が共有することによって一層の成果を挙げ、社会に発信していく必要性が痛感された。そのために、全教員との個別面談を通じた現状の確認と改革への意識の共有、教授会をはじめとした各種会議を徹底的に学生教育のための議論とする改変、教員と職員が別々

に実施してきた研修の一体化（FD／SD↓SDへ）、カリキュラムの改編・新たな学修支援と授業改善など、試行錯誤的ではあるが、走りながら考えるの姿勢で、恵泉は変わり続ける」という改革の歩を進めている。

この過程で私たちがもつとも直視しなくてはならないことは、本学の良い面ではない。むしろ、社会的に見て負とされがちな面である。すなわち「規模の小さい、人文社会科学系の女子大学」。時代の趨勢に逆行するともいえるこれらの面に逆転の発想で挑むことが、とりもなおさず、「生涯就業力」をもつて真の女性活躍のための基礎の育成につながると考える。

まず規模が小さい少人数の大学ならではの真の面倒見のよさを、改めて「生涯就業力」育成に結集することである。本学は1年次から4年次まで一貫したゼミ指導体制を採ってきた。その意義を再確認して、一層の整備に注力する。少人数のゼミだからこそ、安心して自分の意見を言い、他者の意見に真摯に耳を傾ける場となる。「生涯就業力」を構成する「他者と共に歩み、共に生きていける力」の保障である。また、本学は全学生に卒業論文の執筆を義務付

けている。4年間の学びを通して自分の疑問点や関心事を深め、先行研究を精査し、実地調査を行う手法などを学び、自分の言葉で論文としてまとめ上げている。「生涯就業力」を構成する「基礎的な知識・理解・技能」「現状を把握し、たくましく解決し続ける力」の保障である。

さらに、自己肯定感とは「生涯就業力」を磨くためになくしてはならない大切な要素である。学びたい、生涯にわたって成長したいという意欲がなければ、「生涯就業力」を磨き続けることはできない。この自己肯定感とは、大切にされ、愛されているという経験から育まれることは、私の専門領域である発達心理学の基本的知見であるが、少人数教育のもとで面倒見のよさを大切にする女子大の真価が発揮できる点に他ならない。

次に、理数系教育が重視される今日にあって、女性活躍促進には、むしろ人文社会科学系の学びの意義を再確認する必要があると考える。

繰り返しになるが、価値観も人々の生活スタイルも、前例にない複雑多様化に向かっていている今日である。前述の労働市場の劇的な変化に加えて、機械が

人間に代わりつつあることも看過できない。目標に向かつて間違はなく一直線に進むことが機械の利点とすれば、目的も価値観もめまぐるしく変わる中で、戸惑い、ときには立ち止まることこそ人間力ともいえる。将棋の世界では、棋士たちはコンピュータのように必ずしも勝つことだけを目指しているわけではないという。いかにして前例とは違う形にしようかと思案する。そこから、混沌とした序盤を切り開く新手が見いだせるという。

人文社会科学は理数系に比べて「明解な正解」が少なく、成果に即効性も求めにくい学びである。それだけに、あきらめずに考え続け、独善的ではない自分らしい解を模索し続ける力の育成が人文社会科学の学びの特徴といえよう。急速に変化する環境にしなやかに対応し、したたか（強か・健か）に生きる女性ならではの「生涯就業力」は、効率性・合理性の追求だけに走らない人間力の育成であり、これこそ人文社会科学の学びから育まれるものと考えられるのではないだろうか。

おわりに

大学改革を推進する難しさは、必ずしもトップダウンでは実を結ばないことにある。学長のリーダーシップの發揮如何といわれるところだが、私は必ずしもそうは思わない。それだけのカリスマ性も力量もないという自覚が本音であるが、個人的なカリスマ性と力量で改革を牽引できる時代でもない。より重要なのは、教職員一人一人の学生を育てているという自負と誇りを大切にしつつ、一つの方向に向かつて皆が顔を向け、いかに心をついでいるかである。自分たちが行っている教育実践の意義を常に社会のニーズに照らし、そこにいかに存在意義と誇りを持てるかではないだろうか。女性の「生涯就業力」育成は、女性活躍促進への要望が高まっている、まさに今日の社会的ニーズに対して、女子大学である本学の、建学の理念に基づいた真摯な挑戦である。